

# アラブの牧畜民ベドウィンと共に3年、 乾季の日昼は40℃を超える。灼熱の大地の上で人と羊は

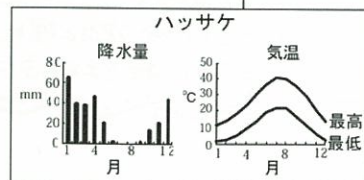
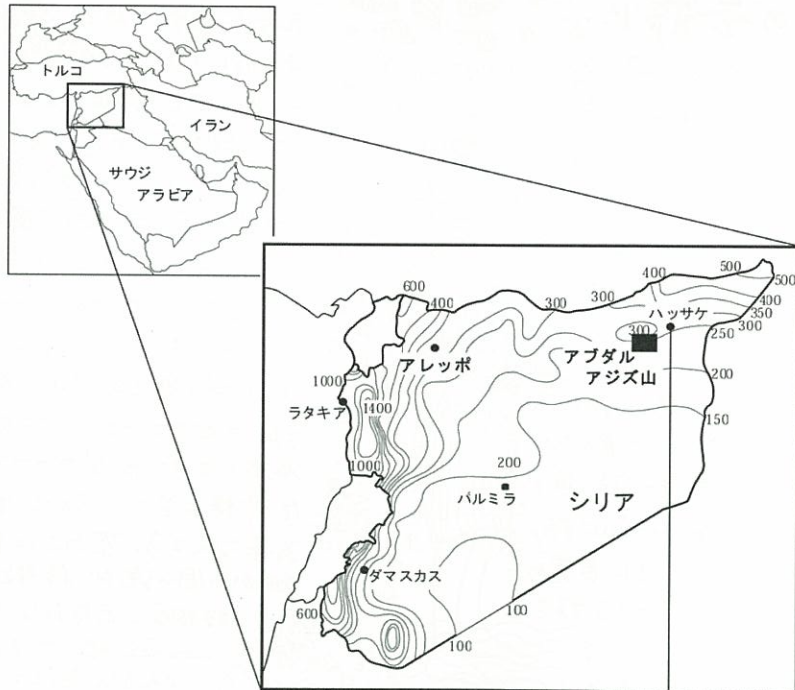


図 西アジアとシリアの等雨量線 (mm)

出典: Climatic Atlas of Syria, 1977. Climate Division, Meteorological Department, Ministry of Defence, Syrian Arab Republic.

# 羊とともにある暮らしを記録する

9000年を生きてきた。

写真・文 平田昌弘



写真左：シリアのヒツジ  
脂尾羊のアワシ種

上：ベドウィンのバグーラ部族  
の放牧：ロバに乗る牧童に先  
導されたヒツジ・ヤギ混成群

下：ベドウィンの牧童と  
種雄ガビッシュ（左の羊）・  
先導去勢雄ミルヤ（右の羊）

シリア沙漠に蜃気楼が遠く地平線に揺らいでいた。炎天下に1時間そつと居だけでも、熱さで朦朧とし、身体から水分と体力とが奪われていく。草木もほとんどない、こんな乾燥した処で、人々は一体どのようにして生活しているのだろうか。これがシリア沙漠に降り立った時の私の鮮烈な第一印象だ。

私は1990年頃にシリアで青年海外協力隊員として3年間過ごした。アラブ系牧畜民(ベドウィン)と生活を共にした。ヒツジの群を追う暮らしの中で、彼らがこの厳しい環境をいかに生き抜いているかを少しずつ知っていく。ヒツジは夏の厳しい暑さの中を悶え、冬の寒さに怯えて痛々しくなりながらも、春の麗らかさを喜び、出産と成長を毎年繰り返していた。地中海性気候という自然環境の流れの中で、交尾するに時が有り、乳を流すのに時が有り、屠られるのにも時が有った。ベドウィンは、そんなヒツジの乳と肉と毛を巧みに利用することによって、シリア沙漠で逞しく生き抜いていたのだ。ヒツジにまつわるベドウィンの民の知恵と暮らしを、これから5回にわたってお話したいと思う。

2. ヒツジの季節繁殖と季節生産
3. ヒツジのミルク加工技術体系
4. ヒツジの肉加工と肉料理
5. ヒツジの世界観

まず第1回目の今回は、ヒツジの季節繁殖や季節生産を大きく左右する自然環境について簡単に触れておきたい。

## シリアの自然環境

シリアは、かつての「肥沃な三日月地帯」の西方半分を形成していた。この地で、麦の栽培化(BC9000年頃)、ヒツジの家畜化(BC8000年頃)、つまり農耕と牧畜が始まったのである。西アジアは人類史に多大な貢献を果たしたと言えよう。そんなシリアの気候は、日本から見れば、極めて厳しい自然環境にある。アレppoは年間降水量が約350mmであるし、内陸のハッサケではわずか約200mmである。日本に強い台風が到来した場合、一晩で降る雨の量だ。降雨は10月から5月にかけて降り、5月から10月にかけては全く降らない。気温は、雨の全く降らない夏の時期に40℃を越え、雨の降る冬には零下になることもある。つまり雨季に寒く、乾季に猛暑という、典型的な地中海性気候にシリアはある。乾季と雨季の移行期には短い春と秋がある。

年間降水量200mm以下というのは、冬雨気候ではいかなる農作物も天水で栽培できないことを意味している。そんな乾燥した地域がシリアの55%も占めている。よって、夏の猛暑の時、人やヒツジは泉や川、井戸の周りに縛られて生活を共にしてきた。このような自然環境のもとに、何千年という時の流れ中で、ヒツジの生命誕生とヒトとヒツジによる生産活動が繰り返されてきたのである。

平田昌弘プロフィール

1967年に福井の小浜に生まれる。少年時代は山登りとテニスに明け暮れる。大学院在学中に休学し青年海外協力隊に参加。シリアでヒツジの魅力に出会う。現在は北海道でヒツジを追いかけている。帯広畜産大学畜産科学科助教授